

さちひろ

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・朝日にほふ山さくら花
- 2面・日本の精神性と宗教
- 3面・おやさま逸話篇から
- 4面・教会の動き・編集後記

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 072-365-2571

E-mail:wat@sachihiro.com url:http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

教会の動き

さちひろ

朝づとめ：毎朝・6時30分
 タづとめ：毎夕・7時30分
 元旦祭：午前7時・午後1時30分
 春季大祭：1月21日午後1時30分
 秋季大祭：10月21日午後1時30分
 月次祭：毎月21日 午後1時30分
 春・秋季霊祭：3月22日、9月22日 午後1時30分



4月29日はひのきしんデー

今年も「全教一斉ひのきしんデー」が開催されました。阪南支部第五組（大阪狭山市）は、今熊一丁目にある市の施設・戦没者慰霊碑周辺の除草作業をしました。狭千廣分教会のすぐ隣にあります。

29日午前9時から、みんなさん三々五々寄り集い、9時より開始セレモニー。まず親神様・教祖・祖霊様を遙拝、天理教表統領のメッセージを



代読、作業にかりました。遺族会の方もお越し頂いて、施設備え付けの掃除道具をたくさん出してくださいました。

今年も、晴天に恵まれた上、草刈り機を2台使用しましたので、作業は順調に運び、11時には、ほぼ終了、すっかりきれいになりました。

参加者は、子供さんも含めて87名でした。来年も、この日には、みなさん挙つての参加をお待ちしております。

《編集後記》

先月も発行を予定していたのですが、雑事に追われて、出すことができませんでした。

隣接する山の宅地造成工事がどんどんすすみます。この様子は、わたしのホームページの掲示板 (<http://sachihiro.com/board/board.cgi>) に写真入りで掲載しておりますので、是非ご覧ください。だんだんとわが家に迫ってきています。

高橋美津志著『ちょっとひとこと』（善本社）という本を教えてください。幸せを届けて、早速手に入れました。「幸せを届ける言葉」が満載されています。次号よりこの内容を一つずつ本紙に掲載させていただきます。お楽しみに。

さちひろ 第3号

編集兼発行人・山口 渡
 平成17年5月21日
 大阪狭山市今熊1丁目1133番地
 ・072・365・2571

朝日にほふ山さくら花

桜は日本を代表する花であり、新しい年度が始まる4月に咲くので新入生の希望が託された花という印象をもたれる方もおいででしょう。

左に掲げた歌は、「18世紀最大の日本古典研究家」と言われる本居宣長の自画像自賛像に認められた賛です。

宣長は40才をこしてから、こよなくこの山桜を愛しました。44才の自画像でも桜をモチーフにした歌を詠っていますし、『遺言書』では奥墓に植えるよう指示したようです。また自ら付けた謠（おくりな）にも「秋津彦美豆桜根大人」

これは宣長六十一
 寛政の二とせと
 いふ年の秋八月に
 手つからうつしたる
 筆のかゝたなり、
 峯のついでに、
 しき島の
 やまとこゝろを人とは、
 朝日にほふ
 山さくら花

（アキツヒトミツサクラネノウシ）とあります。

小林秀雄は『考えるヒント』で、この歌を次のように評しています。

この歌は、宣長が、還暦に際して読み、自画像に自賛したものだ。それはよく知られているが、宣長という人が、どんなに桜が好きで、よく知られていないのは、どうも面白くない。それを知られば、この歌は先ず何をかいて、桜が好きで好きでたまらぬ人の歌だと合点して受け取るわけで、そうすれば何の事はない、「やまと心を人問はは」の意は、ただ「私は」と言う事で、「桜はいい花だ、実にいい花だと私は思う」という素直な歌になる。

春の早朝、朝陽を浴びて、照り輝くような山桜の姿、それが日本人の心だと宣長は言うのです。そのような清々しい、爽やかさを訴えています。宣長が理想としてた日本人の心（清く明るく直き心）を

詠んだ歌ということです。

日本人は、古来から、誠を、無私、清明であるとして尊び、文武芸術の道にあつても、仏教や儒教の装いをしていても、「明き清き誠の心」を、その求道的浄化の目標としてきました。

心の深層部分に魂があります。お心で生きてはそれを「たまひい」と表記されています。「高山にくだらしているもまたにそこに」(十三号45)。

これを「玉」と「火」と解釈すれば、心の無私・清明に通じるでしょう。当時の人々は常識としてそういう知識をもっていたから、それを慮って、このような表記になったのではないかと推察します。

宣長の思想と天理教の教えとは直接のつながりはないのですが、今日の日本に今いちはばん取り戻したいのは、誠の心、この「清く明るく直き心」だと思えます。



天理の紹介

「日本の精神性と宗教」天理大学創立80周年記念公開シンポジウム

天理大学創立80周年と天理教二代真柱生誕100周年を記念して開催されているシンポジウムについては、創刊号でその第一回の予告をしたが、すでに4月23日に開催され、その詳細は、毎日新聞5月14日号に掲載されています。すでにお読みの方もおられるかも知れませんが、私が今回参加したのは、5月14日(土)に、天理大学9号棟(ふるさと会館)で開催された人間学部主催の公開シンポジウム「日本の精神性と宗教」です。基調講演として、文化庁長官である河合雄雄氏が、指定討論のパネラーとして、京都造形芸術大学教授の鎌田東二氏(「日本の伝承文化における宗教」と国際文化研究センター所長の山折哲雄氏、それに天理大学長の橋本武人)、「こころの諸問題と宗教」が出席され、澤井義次・天理大学教授の司会進行で進められました。そのうち、河合氏の基調講演の要旨をまとめて、2回に分けて、ここに報告します。

ちなみに、河合氏は、かつて17年間天理大学に籍をおかれていて、わたしも在学中にその講義を受講したものでした。……

少し前までは、宗教と言えなにか胡散臭いなあという感じだったが、今日、宗教へ関心が高まっている。その原因は、2つあると思う。1つは、グローバルイゼーション、世界中とコミュニケーションが容易にできるようになったことで、世界の人々の行動の背景に宗教があることが分かってきた。日本人ももっと知った方がいいと思うようになってきたからである。これまで、宗教を考えない民族などなかったが、日本人は無視して生きていた。

もう1つは、日本の国内事情である。びっくりするような凶悪犯罪が多く発生し、生命をおびやかしているから。宗教・倫理を考えなければならぬと思いが出てきた。

* * *

カイトでこんな質問を受けたことがある。「わたしは日本人は好きなのだが、日本人はわれわれと違って、全然祈ることをしない、エコノミック・アニマルのように見える。だが付き合ってみるとおもしろい。それはいったいどこから来ているのか。」

この人があるとき、日本に行く機会があった、列車の切符を買う。そこで持参した上等のカメラを置き忘れてしまった。これはもう見つからないだろうと諦めつつ、駅に電話連絡をすると、「保管しています」という。祈りをしない日本人、信仰をしてないのに、日本ってすばらしい。一体どうなっているのか、という質問である。すなわち日本人は特定の宗教を信仰してなくても、日常生活のなかでの宗教性はもっているのである。自分に欠いた存在に畏敬の念を持つ、そこに宗教性がある。宗教性を日常生活で実践しているのである。「勿体ない」ということを言う。(次号につづく)

『稿本天理教教祖伝逸話篇』 64

ある日、泉田藤吉(註、通称藤吉)が、おぼろしく恋しくなつて、帰らせて頂いたところ、教祖は膝の上で小さな紙を伸ばしておぼろしく、お聞きせられたのにや。

「こんな難儀でも、やんわり伸ばしたら、綺麗になつて、又使えるのや。何一つ壊らなかつてものはな。」

とお話し頂いた泉田は、喜ぶ勇んで大阪へかえり、又一層熱心におたすけに廻つた。しかし、道は容易につかない、心が倒れかかると、泉田は、我と我が心を励ますために水こりを取つた。嚴寒の深夜、淀川に出て、一っ刻程も水に浸かり、堤に上がつて身体を乾かすのに、手拭を使つては機能がなないと、身体が自然に乾くまで風に吹かれていた。水に浸かっている間は左程でもないが、水から出て寒い北風に吹かれて身体を乾かす時は、身を切られるように痛かつた。が、我慢して二十日間程、それを繰り返した。

又なんでも、苦しまねばならんといひひつとを聞いていたので、天神橋の橋桁につかまつて一晩川の水に浸かつてから、おたすけに廻わらせ

やんわり伸ばしたら

て頂いた

「いつかからせて頂く、教祖は」

「藤吉さん、この道は、身体を苦めて通るのやない。」

とお言葉を言われた。親心溢れるお言葉に、泉田は、かりものの身の上の責を、身にお沁めて納得させて頂いた。

註 一っ刻は、約1時間

泉田藤吉：天保11年(1840)5月10日、大阪今里、生まれ。明治4年おちばに初めて参拝。明治10年、酒の飲み過ぎから胃カシになつたが、かしも・かりもの話を聞いて納得。不思議な守護を得た。その後、「この逸話篇」であるようにかなり猶大な布教をされた。1903年。

「教を伸ばす、修行」

(Spittaia Berdse、岸本英夫)

「正義」は、行動を通じて心を鍛えぬ言ひをいつ、日給茶飯の行いも、その意図がはたなわれると、修行にそれれます。たゞしは、進歩を掃除や生産活動などの作務(そく)も最終業(さいごう)に算入(けい)じられます。

天理教を同じように考えられています。しかし、狭義には、精神をきたえ、宗教的な理想を宗教体験の上で実現するために言まれる行動体系を修行と呼ぶています。

類語として、苦行、苦行(がら)がら、苦行は、とく(肉)体にきびしい苦痛を与え、それに耐えること(に)よつて宗教上の理想とされた体験を得ようとするものをいいます。一方、修行は、修行の荒々しい様子を指して言つた言葉です。

具体的には、断食、水行、不眠、山岳修行、それらを組み合わせた十日回廊行、座禅など。

キリスト教やイスラム教では、祈りの一つの形態として展開しています。中世の儼然、たゞしはロミオの入りキエナル、エナササイズなど。

天理教の修行は、「この逸話篇」に記されているように、苦行の類のものはない、かりものの体を手で洗つての「観音」から、むむむと懺悔をされます。

泉田藤吉は「おちば」から「おちば」まで、おぼろしく「修行」を志して来たのですが、おちばはそれを、「やんわり伸ばしたら」「いいや、お忠告をされた、そのように受けとめる」ことが出来ます。